

栃木県における柿本人麻呂解釈の展開

——宇都宮大明神と人丸神社——

佐藤 智敬

目 次

はじめに

第一章 柿本人麻呂信仰の混在

第二章 宇都宮大明神人麻呂祭神説と示現神社の展開

第1節 示現神社の呼称

第2節 宇都宮二荒山神社祭神柿本人麻呂説

第3節 人麻呂信仰と下野宇都宮氏

第4節 吉田神道の関与

第5節 下野における柿本人麻呂と小野猿丸

第6節 宇都宮二荒山神社祭神柿本人麻呂説の盛衰

第三章 栃木県下の人丸神社信仰

第1節 人丸神社の展開

第2節 水の神

第3節 柿の木との関連

第4節 安蘇郡小中の人丸神社と人麻呂信仰

おわりに

はじめに

本稿は柿本人麻呂解釈についての考察である。平安時代以降、柿本人麻呂は日本を代表する歌人とされてきた。それゆえか人麻呂に関する神社や信仰、伝説が日本各地に伝わっている。中でも著名なのが明石、石見の柿本神社である。これらは人麻呂が当地で和歌を詠んだ事に起因するものである。また寺社由緒などによってさまざまに人麻呂像が再構成されてもいる。人麻呂の実像探求は古くから行われ、近代以降も、折口信夫や斉藤茂吉、高崎正秀、梅原猛、桜井満らによってすぐれた著作がある⁽¹⁾。これらは、万葉集等の解釈、各地に伝わる人麻呂伝説や、近世の人麻呂に関する書物等を検討することにより日本史の中では謎とされてきた人麻呂像を浮き彫りにしようとする意欲的な試みであると言えるだろう。

本稿は上記のような柿本人麻呂の実像の検討が目的なのではない。栃木県（下野国）という特定の地域における人麻呂の認識についての検討こそ目的なのである⁽²⁾。過去、人麻呂について論じている折口、高崎、斉藤、梅原らは、「人麻呂の実像の再構成」の視点で大方の論を組み立てている。その論考に口をはさむことは容易なことではない。しかしその視点でなく、何ゆえに人麻呂が全国各地で取り上げられ、信仰されていったのか、また信仰対象、伝承世界の人麻呂像はいかにして形成されていったのかを考証する事は可能のように思われる。本稿ではおもに神社由緒の中に現れる人麻呂伝説から、人麻呂伝説を形成、伝播、保有するにいたった土地との関連および人麻呂伝説の背景を窺うことを目指したい。

人麻呂の実像についての論考が各種あるのに対して、栃木県下の伝説の形成、受容という点で人麻呂を考察しようとする試みは少ない⁽³⁾。小林吉一は、

栃木県はどういうわけか西の島根・山口両県と並んで人丸を祭神とする神社等が集中している所なのだが、みてのとおりそれは万葉集とはとても遠い。だから、この仕事はまずもって栃木県の文化風土の闡明に資するはず

のものであり、ひいては柳田先生が『神を助けた話』や『一目小僧その他』などで先鞭をつけて久しい民俗信仰とか文化的知識におよぶのを第一義としなければならないのだと考える。しかるのちに、我々は伝承から認知し開発した民俗論理をひっさげて、万葉の叢林に確かな斧をふりおろすことになるだろう⁽⁴⁾。

と述べ、人麻呂の実像を追うことではなく、人麻呂信仰を受容した下野国の考察に力点をおいている。小林は栃木県内の人麻呂にまつわる信仰、伝説を網羅し、詳細に調べあげた。そして実際にいくつかの土地を訪れて現地の状況を合わせて人麻呂信仰の全体像を描こうと意図している⁽⁵⁾。

本稿はこうした小林の視点を継承しつつ、柳田ら先行研究によって規定された全国に広がる人麻呂像の根拠の一部が栃木県下のみで通用するものにすぎないことを明らかにする。さらに様々な人麻呂解釈、信仰についての記述から栃木県が人麻呂信仰の一中心地と解釈された経緯を検討する。その上で栃木県下の人麻呂信仰の特徴を明らかにしたい。

なお、本稿では歴史上の人物の事績、祭神説等を神社由緒が説明している、との立場から、人麻呂についての記述を「人麻呂についての伝説」、ととらえている。人名の表記について、「人丸」「人麿」等数種の表記が存在する。本稿では文献からの引用や、特別の配慮をする必要のない場合は「柿本人麻呂」の表記で統一した。

第一章 柿本人麻呂信仰の混在

小林は、栃木県下における人麻呂信仰は人丸神社、人丸様と呼ばれる神社を中心としたもの、との見解を示している。そして人麻呂伝説、信仰形態の分析として、A：人丸神社、B：かつての人丸神社を合祀した神社、C：示現神社、宇都宮、二荒山神社、D：個人で祀る人丸様と四種に分類している。この分類は柳田、斉藤、梅原等先人の分析を踏まえた上での分類と考えられる。分析の結果からは、安蘇郡、下都賀郡に多く分布していることが分かる。

さらに、柳田国男以来指摘されている宇都宮二荒山神社との関連も読み取ることできる。ここで小林の分類しているA、B、Dは人麻呂信仰として共通する。しかしCのみは単なる人麻呂信仰ではなく、ほかの神社祭祀が混入するものであり、前者と二大別できるように思われる。このことをふまえ、小林の分類の背景となったであろう柳田国男による下野の人麻呂伝説に関する各神社の位置および、伝説に対する考察について考えてみたい。

柳田による柿本人麻呂についての主な論考は、小林の指摘するうちの一つ『一目小僧その他』の中にある「目一つ五郎考」である。それは明治期に編纂された『安蘇史』、『下野神社沿革史』等を参照し、栃木県内に柿本人麻呂と関連する神社が多く分布することを指摘した最初のものである。柳田は安蘇郡出流原の人丸神社や那須郡小木須の示現神社の例をあげつつ下野の人麻呂信仰の特徴を説く中で、

特に社の名を示現明神と称し、またいはゆる示現太郎の神話を伝へたものが多い。近世の示現神社には本社同様に、大己貴事代主御父子の神、或ひは豊城入彦を配祀すともいつてゐるが、那須郡小木須の同名の社などは、文治二年に二荒山神社を奉請すと伝へて、しかも公簿の祭神は柿本人麻呂朝臣、社の名ももとは柿本慈眼大明神と唱へてゐた⁽⁶⁾。

と述べている。柿本人麻呂と片目の神との関連を示唆する節として著名なこの論考で、人麻呂と栃木県内に広く分布する「示現神社」との関係に触れているのである。更にこの後三月十八日という日付と人麻呂の関連、更に観音信仰その他の忌日と結びつくのではないかとの説を打ち出す。

その後梅原猛はこの説を踏襲し、語源的に発展させた説を打ち立てている。それは

柿本大明神の効験は、第一に水難、第二に眼病、第三に火難、第四に安産であるが、第三は「ヒ・トマル」からの連想、第四は「ヒト（ウ）マル」の連想であり、第二は人丸神社は多く示現神社といわれるが、この示現が

慈眼と同音で、観音経の「慈眼を以て衆生を見る」という言葉の連想から、観音信仰とつながり、人麿は観音の化身であるとともに眼病の靈驗あらたかな神であるということになったのであろう⁽⁷⁾。

とするものである⁽⁸⁾。ここで注目すべきは、柳田、梅原らが説く、祭神柿本人麻呂＝示現神社＝慈眼＝観音信仰という結びつきである。この分析は一見理に叶っているように見え、人麻呂研究上常識的見解となっている。実際栃木県に限らず全国的に見て、人麻呂信仰と観音信仰は密接に関連している。柳田以降、多くの研究者が引用する那須郡小木須の示現神社（現在は合祀され熊野神社）は文治四年（1188）に「当国一の宮二荒山神社を奉遷し柿本慈眼大明神と称せし」⁽⁹⁾ といひ、安蘇郡田沼町彦間の宇都宮神社は宇都宮大明神→慈眼大明神→宇都宮神社の順で改称しているという。この他にも確かに「示現（慈眼）神社」は栃木県下において広く分布している⁽¹⁰⁾。

しかし県下の「示現神社」すべてを今一度分析してみると、人麻呂との関連を論証しきれないものが多数存在するのである。「示現神社」と称する神社は栃木県だけに集中しているものであり、柿本人麻呂を祭神していたことを公言している「示現神社」は宇都宮二荒山神社、小木須の示現神社のみしか存在しない。そしてそのうちの宇都宮二荒山神社は現在、柿本人麻呂を祀っていたことを表明していない。明石、石見、大和といった人麻呂伝説の中心地は言うに及ばず、人麻呂信仰を持つ神社の大半は「柿本神社」「人丸神社」といった、より直接的な呼称である。人麻呂を祀るとする「示現神社」は決して多くないのである。また栃木県内の「示現神社」で、人麻呂を祭神とし、以前の社名を人丸神社、柿本神社と称していた事を証明できる神社など一社も存在しないのである⁽¹¹⁾。柳田、梅原が共に主張する「人丸神社は多く示現神社といわれる」との説は栃木県下においても成立しないのである。

柳田の論以降、日本国内において人麻呂を祀る神社に「示現神社」が多いとする説は広く定着しているように思われる。しかし、その説は安易に全国的規模に拡大できないものと思われる。栃木県下だけに「示現神社」、「人丸

神社」と二通りの人麻呂伝説の展開が存在したと考えられる。先行研究に沿ってそれら二通りの展開を混在させ、更に全国的な人麻呂信仰の傾向として登場させる事には無理があるだろう。範囲を狭め、栃木県下において広まった歴史的経緯について述べることのみが可能であろう。以下、過去混在され続けている「示現神社」と称する神社と、「人丸神社」と称する神社に大別し、それぞれの傾向を分析してみることにはしたい。

第二章 宇都宮大明神人麻呂祭神説と示現神社の展開

第1節 示現神社の呼称

そもそも先学が指摘する「示現神社」とは何であるかを考えなくてはならない。県下に多く存在する「示現神社」の呼称の中心に位置するのはおそらく宇都宮市馬場町にある宇都宮の二荒山神社である。この神社は宇都宮市街の中心に鎮座している著名な延喜式内社である。そしておそらくは「示現神社」と柿本人麻呂をつなぐ鍵となる神社である。この神社は日光二荒山神社とともに下野の名社として信仰されてきた。現在この神社は豊城入彦命を祭神としているが、かつてこの社は示現太郎を祀るとされていた時期がある。それは大分古いことであつたようで、南北朝時代の作と言われる『神道集』にその名が現れる。諏訪大社の縁起である「諏訪縁起事」には

甲賀ノ太郎殿ハ日本下野国宇津ノ宮ニ御在ハ示現太郎大明神ト顕給御父ノ
甲賀ノ權守ハ赤山大明神顕給御母ハ日光權現顕給、皆御本地弥陀薬師普賢
千手地藏等ナリ⁽¹²⁾

といった記述がある。さらに柳田が「示現太郎の神話」と称しているものと
思われる「甲賀三郎」の要約を、柳田の記述にしたがって示せば、

昔甲賀權守諏胤が子に、甲賀太郎諏敏甲賀二郎諏任甲賀三郎諏方と云ふ三

人の子があつた。三郎は信州蓼科嶽の人穴に入り数年の間怪しき国を巡り居る間に兄二人して三郎が所領を犯し奪ったが、二郎なほ悪逆あるに由つて太郎は之を避け、所領下野宇都宮へ下り、後に神となって示現太郎大明神と云ふ⁽¹³⁾

となり、『神道集』五卷の「宇都宮大明神事」でも「抑此明神ハ諏訪大明神ニハ御舎兄也⁽¹⁴⁾」とある。「甲賀三郎」すなわち弟が諏訪大明神であるというのが諏訪明神の縁起であるので、『神道集』の中で多少の差はあるが宇都宮が示現太郎を祀るという点で内容は一致する。

『神道集』に限らず近世に編まれたとされる「宇都宮誌」の記述にも「示現太郎宮」の記述があり、細矢藤策によると、日光二荒山神社の祭神としても「太郎明神」の名が存在したという⁽¹⁵⁾。つまり近世以前において、「示現神社」の起源とされるのは示現太郎を祭神とした二荒山神社であることがわかる。

明治三十五年編纂された『下野神社沿革誌』において下野各地の「示現神社」の記述を集めてみると、祀っているのは柳田の述べている通り大己貴命、事代主命、豊城入彦命が大半であり、祭神はほぼ宇都宮二荒山神社の祭神と同じものである。人麻呂との関連性のあるものはその中のごく一部であるということに注意しなくてはならない。以上から示現の呼称が祭神示現太郎に影響されたものであり、先学が指摘する全ての「示現神社」が人麻呂を祭神とするとの説は成立し難いと思われる。

第2節 宇都宮二荒山神社祭神柿本人麻呂説

しかしながら宇都宮二荒山神社が柿本人麻呂を主祭神とすると解釈されたことがないわけではない。後に誤りであると指摘されたその主張は、江戸時代の『和漢三才図会』には「宇津宮大明神 祭神柿本人麿の靈」、播磨明石の人丸神社の説明にも「下野宇津宮 石見高角山 播磨明石 [以上三所に人丸の神社がある]」⁽¹⁶⁾と記述されている。このことに関して『下野國誌』には

和漢三才圖繪には、柿本人麻呂ノ靈と記したり、是は當社の寶庫に、古き人麻呂の畫像あれば、其をやがて神躰なりと、思ひ違ひし非事なるべし、そもそも此みやしろに鎮め祀りしは、上の卷に擧たる、上毛野ノ君下毛野ノ君等の始祖豊城入彦ノ命なり、⁽¹⁷⁾

とあり、神宝の人麻呂の画による誤伝ととらえている⁽¹⁸⁾。

また齊藤茂吉は「小室氏 人麿明神縁起」で「享保三戊戌歲閏十月廿九日」と年代の記述がある秋田藩士族の小室氏の縁起系図を紹介している。その内容は「野州下野國宇都宮大明神者、柿本人麿靈神、是小室之元祖也、因茲小室代々宇都宮大明神奉崇氏神⁽¹⁹⁾」としている。これについて齊藤は

今の宇都宮市に鎮座の国幣中社二荒山神社は舊名宇都宮大明神であるが、祭神が人麿でないことは明らかであるのに、和漢三才圖繪に『在宇都宮城良、社領千七百五十石。祭神柿本人麻呂ノ靈』とある。それについて、地名辭書に、『是は當社の寶庫に、古き人麻呂の畫像あれば、其をやがて神體なりと思ひ違ひし非事なるべし』とあるから、或は、小室氏の人麿明神も、和漢三才圖繪と同系統の傳説に據つたものであらうか⁽²⁰⁾。

と考察している。すなわち、ある時期に宇都宮大明神の祭神が柿本人麻呂であるという風説、あるいは縁起が広まった可能性がある。そして神職などの知識層の手によって、宇都宮大明神すなわち示現太郎明神は柿本人麻呂を祀る、という説ができあがったというわけである。そしてその説はさらに近世の国学者達の解釈により、現今の豊城入彦命祭神に改まったものと思われる。

第3節 人麻呂信仰と下野宇都宮氏

宇都宮二荒山神社と人麻呂信仰を関連付ける典拠は、かなり古くさかのほることができる。それは鎌倉時代からこの地域を根拠地とし、宇都宮大明神社家でもあった宇都宮氏存在である。彼らこそ中世宇都宮大明神の実質的管理者でもあったと考えられる。

宇都宮氏は連歌の家柄として戦国時代まで続いた名族であり、藤原宗圓を祖とする。宇都宮氏と人麻呂を結ぶ線として、宗圓の父とされる藤原兼房と人麻呂を関連付ける説話が存在する。

正徳二年（1712）刊の『和漢三才圖繪』の播磨明石の人丸神社の箇所を見ると、

言い伝えによれば、藤原兼房は夢で人麿に遭った。烏帽子・直衣・紅袴を着て左手に紙を持ち右手に筆を握って、梅花の下に立っており、年は六十余くらいであった。覚めると画工にその肖像を画かしめ珍藏していた。白河上皇に献じ、鳥羽の宝庫に納められた。今の世に画かれる人丸の画像は全てこれに拠る。

人丸は和歌の守護神であることはよく知られている。かつ当社は安産を守り火災を避ける〔安産は人円（ひとまどかなる）の義を取ったものか。火を禦ぐのは火止の義を取ったものか〕⁽²¹⁾

とある。そして人麻呂の画像が藤原兼房（1004～1069）の夢に現れたものを写した像である、と伝えていることがわかる。

『万葉集』等に数多くのすぐれた和歌を残した人麻呂は古くから歌聖として神格化されていた。そして神として現れた彼の画像を掲げて行う、人丸影供と呼ばれる行事が平安時代から行われていた。その起源、画の作者に諸説あるが、代表的に伝わるものこそ藤原兼房作画説である。人丸影供に用いられる人麻呂の画像を藤原兼房が夢想をもとに描いた、とされる説話の成立は古く、建長六年（1254）成立の『古今著聞集』四の二には

元永元年六月十日、修理大夫顕季卿、六条洞院亭にて、柿本大夫人丸供をおこなひけり。件の人丸の影、兼房朝臣あたらしく夢みて図絵する也。左の手に紙をとり、右の手に筆をとって、年六旬ばかりの人なり

と、『和漢三才圖繪』の記述が中世には伝わっている事が分かる。同様の説

話は建長四年（1252）成立の『十訓抄』四にも見られる⁽²²⁾。

嘉永三年（1850）編纂の『下野國誌』にも、「柿本朝臣人麻呂之畫像」の説明書きに「傳云、粟田少將藤原兼房朝臣所見夢之圖也、朝臣者宇都宮初祖宗圓之父也」、「人麻呂ノ畫像ハ、足利戸田侯ノ臣田崎明義ガ摸シテ収藏セシヲ縮圖セル也」とある⁽²³⁾。宇都宮氏の祖、藤原宗圓の父の事跡として人麻呂画像の由来が古くから説明されることは、宇都宮氏が和歌の家柄であることの正当性を主張している⁽²⁴⁾。

原典は不明であるが、明治期に編纂された『安蘇史』には兼房が人麻呂を夢に見、人麻呂を信仰した後和歌の学が上昇した事を説き、

兼房の嫡子宗円阿闍梨が康平六年癸卯二月再び下野宇都宮下向を命せられ守護職兼日光山別当職に補せられたる時父兼房の信仰したる故を以て播磨国明石浦より分靈して宇都宮に祀る（合祀）是れ宇都宮明神也⁽²⁵⁾

と、宇都宮大明神に宗円が人麻呂を合祀した、との説を紹介している。当然和歌の信仰として人丸影供が行われていた可能性は高い。中世の宇都宮大明神の管理者宇都宮氏が和歌の神として人麻呂信仰を行っていた事をも連想させる。

勿論、宇都宮氏滅亡後に宇都宮二荒山神社を管轄した社家の解釈によって宇都宮大明神の祭神が人麻呂に認定されたとすれば、和歌の神、宇都宮歌壇と人丸影供の祖藤原兼房を結び付けたのは近世以降とも考えられる。『下野國誌』も『和漢三才圖繪』の兼房説話を参照した形跡がある。そして『神道集』などによる示現太郎宮であった現宇都宮二荒山神社に、柿本人麻呂という祭神が付与されたのが宇都宮氏によるものであるのか、近世以降の解釈であるのかは現段階では確定しがたい。今後の課題としたい。

第4節 吉田神道の関与

こうした宇都宮大明神＝人麻呂説の展開には、従来、神宝の人麻呂の画が誤伝の根拠と分析されてきた。しかしこれまで指摘されてこなかったが、吉

田神道（唯一神道）の影響がもっとも大きい。その根拠として『大和国葛下郡神社明細帳』（明治十二年）の「柿本神社」の由緒は、

人丸遺跡の事^(ママ)和州にも三箇所あり 猶諸国に塚石碑社頭数をしらす 其内
総州宇津宮大明神は人麿也 社頭の軒近く大木の柿木あり 神門の額に日
光大明神とあり 日光の一字子細ある事とそ 吉田の神竜院兼俱の説
也⁽²⁶⁾

と、二荒山神社の人麻呂祭神説に吉田神道を確立した吉田兼俱（1453～1511）⁽²⁷⁾の解釈が関与していることを説明している。

この説の登場は、さらに古くさかのほる事ができる。慶長十一年（1606）以前成立とされる『超大極秘人丸伝』（写本は多く、本稿は吉田文庫版を参照。この万延元年写本は吉田兼雄筆、細川幽齋から松永貞徳に伝授されたものという）に「吉田神竜院兼俱ノ曰宇津宮大明神ハ人丸也」⁽²⁸⁾と記述し、この説が江戸時代初期には存在したことが分かる。また松永貞徳が正保元年（1644）著した『戴恩記』にも「吉田の神龍院のたまひしは うつの宮の大明神は人丸にておはすと云々」⁽²⁹⁾と、吉田兼俱本人の説として宇都宮大明神とは人麻呂であると主張している。

『戴恩記』は和歌の古今伝授の歌学書として著名である。前述の『超大極秘人丸伝』は古今伝授に用いられた『八雲神詠伝』のうちの一章である。この『八雲神詠伝』は古今伝授に欠かせないものであり、さらに吉田家により神道的な解釈が付与されている⁽³⁰⁾。秘伝の書とされているが、写本は多く残り近世には広く流布していたようである。またその『八雲神詠伝』等を参照して記されたとも考えられている『戴恩記』は歌学の古典として『続群書類従』にも載録されている。つまり多くの人々の目に触れる機会があったといえる。宇都宮大明神＝人麻呂説を主張する『和漢三才圖繪』の記述の原典も、これらの歌学書ではなかったかと思われる。少なくとも室町後期には宇都宮大明神祭神人麻呂の解釈は成立していた。それが近世において吉田神道と深く関わる歌学の世界を媒介として歌学書の普及などにより広く流布して

いたと考えられる。

さらに文化四年（1807）に著された、吉田家が管轄する全国の神社を記した『神祇管領吉田家諸国社家執奏記』には、各地の管轄する神社を列挙する中で、下野国の数ある管轄神社の筆頭に「宇都宮」と記述している⁽³¹⁾。つまり近世には宇都宮大明神は吉田神道の管轄下にあったことがわかる。彼等は祭神解釈にも深くかかわり、宇都宮大明神＝人麻呂説を近世の知識人に流布し、下野の「二荒山神社」「示現神社」の一部に定着させるのに一役買ったのではないだろうか。

吉田兼俱の説として引用される祭神説の典拠は不明である。また栃木県下においても兼俱の説を引用した文献は見つかっていない。あるいは吉田神道の確立者である兼俱の名を利用し後世に改めて主張し直されたものとも考えられる。しかしこの解釈説は様々な形で引用され、影響は明治期の奈良県の『神社明細帳』にまでその形跡が残るほどであったとは言えるであろう。

第5節 下野における柿本人麻呂と小野猿丸

梅原猛は柿本人麻呂＝猿丸太夫であるとの説を打ち立てた⁽³²⁾。それは互いに歌人であり謎が多く、詠んだとされる歌が重なっている部分が多分に見受けられたからであるが、この宇都宮二荒山神社もまた猿丸太夫との関連性が想起できる。現在でも二荒山神社は日光と宇都宮で延喜式内社の本家争いをしている。そして、その日光の神の縁起として「日光山縁起」があり、これはまた、『神道集』の記述がもっとも古い。

日光の縁起は柳田の「神を助けた話」の中で詳しく紹介されているものであり、『神道集』では「オンサラマ」という人物が赤城と日光との戦いに関与し日光側につき勝利させたという記述である。是が後世になって発音をもじってか「小野猿麿（猿丸）」と記載されるようになっていく。近世の記述でも「小野猿丸太夫」と記述しているものがある。桜井満はそのことにふれ、

二荒山の神主は小野氏で、猿丸の子孫だと言われている。その猿丸は二荒山の神（蛇神）が攻めてくるのを弓で射退けたと伝える。宇都宮大明神は

この猿丸太夫を祀るという一方、柿本人麻呂を祀るという伝えがあるのは、誤伝だとして軽々に見逃せない。下野は猿丸太夫の大きな足だまりであると同時に、人丸信仰の大きな吹きだまりなのであった⁽³³⁾。

とし、こうした信仰や事跡を伝えたと推測される小野氏についても論じている。小野猿丸の事跡は日光にとどまらず、奥州に及ぶマタギなどが所有していたと言う「山立根本由来記」にも使われている事跡である。柳田国男は『神を助けた話』の中で『神道集』などの縁起を伝えた人物達として小野氏の存在を紹介しているが、実際の所は不明である。日光を基礎とした由緒、伝説はさまざまな形に派生し、語られ、更に土地の歴史などと密接に関わりながら記述されてきたことが伺えるだろう⁽³⁴⁾。こうした関連からも、宇都宮大明神が人麻呂を祀る、と主張する根拠が窺えると言えるであろう。

第6節 宇都宮祭神人麻呂説の盛衰

これまで栃木県下において宇都宮大明神が人麻呂を祭神とする、との説の検討を行ってきた。しかし人麻呂祭神説が広範に認知されたかといえば疑問である。江戸幕府の儒官であった林羅山が元和三年（1617）登山した際の見聞をもとに著した『二荒山神伝』には、『神道集』の記述をもとに「宇都宮神、日_二猿王_一。即日光山神子也。」⁽³⁵⁾とし、『戴恩記』の成立と前後して宇都宮の祭神を考証している。そこでは小野猿麿の記述はあっても人麻呂には一切ふれていない。さらに近世初期の神道家、橘三喜が諸国の一宮を廻った時の記録『一宮巡詣記』四卷 延宝六年（1678）の記録には、

下野国河内郡下野一宮二荒山神社にまふでぬ、うつの宮、いちの宮音相通へり、神主中里市正藤朝高が宅へ行、社の由来聞侍る、三社は大己貴命 事代主命 味耜高彦根命⁽³⁶⁾

とあり、近世前期に宇都宮では人麻呂ではなく豊城入彦命、大己貴命等記紀に登場する祭神を主張していたことがわかる。そして神社が人麻呂を祀ると

いう主張は、当の宇都宮二荒山神社の記録、由緒からはみつかっていない。宇都宮二荒山神社自体が人麻呂を祭神とする、との由緒を主張してはいないのである。

神仏分離以後の国家神道の政治下において編纂された『下野神社沿革誌』以降の神社の祭神を見ていくと、宇都宮二荒山神社を勧請したことを伺うことができる示現神社は多くある。しかし、先程述べた通りに示現（宇都宮、二荒山）神社と柿本人麻呂をつなぐ神社は宇都宮二荒山神社を含めて二社のみしか見つけることができない。一斉に各神社の祭神が変更され形跡も窺えない。ということは人麻呂と関連する二荒山神社、宇都宮神社、示現神社の方がある時期にそうした解釈を付与された特殊なものであったと思われるのである。

宇都宮二荒山神社以外、唯一人麻呂を祀る、と説明する那須郡小木須の示現神社はこの人麻呂祭神説に影響された勧請、もしくは祭神の解釈ではないだろうか。宇都宮二荒山神社についても、延喜式内社であるためか近世、何度も祭神の考証がなされた。そして本居宣長、伴信友等、吉田神道の解釈に否定的な国学者らにより祭神が豊城入彦命である、との解釈がなされ固定された⁽³⁷⁾。以降その解釈が主流となり、人麻呂祭神説は排除されたのだと思われる。

宇都宮二荒山神社がある時期には示現太郎明神を祀り、またあるときには柿本人麻呂を祀るとされた（或いはそのように解釈された）こと、そして複雑な言説を付与されながら宇都宮についての記述が変化し絡まりあってきたことを述べた。以上から宇都宮大明神が人麻呂を祀る、とする解釈の成立は室町期と考えられるが、その流布はおそらく近世周辺の一時的なことであったと推測できる。宇都宮大明神人麻呂祭神説はこうした宇都宮二荒山神社の由緒、解釈の変遷のなかで生まれ、主に和歌の世界では認知されていた。それが下野国内で一部受容され、その影響が栃木県内の「示現神社」、「二荒山神社」の一部に残っているということが出来るだろう。

第三章 栃木県下の人丸神社信仰

第1節 人丸神社の展開

前章にて明らかにした宇都宮との関連とは別に、栃木県下において「示現神社」とは別の系統で人麻呂信仰を展開した土地があった。それは示現神社、宇都宮大明神との関連ではない安蘇郡、下都賀郡を中心とする「人丸神社」の分布である。

かつては大半の神社が人丸神社あるいは宇都宮大明神、通称人丸様であり、近世になりそれらが示現神社と改称され祭神も改められた可能性もあるのではないかと、との反論もあるかもしれない。その立場は柳田や梅原の論に寄与するものでもある。しかし第一に「示現神社」と「人丸神社」が現在でも並立して存在すること、第二に「示現神社」の祭神が人麻呂であっても、「示現神社」が以前人丸神社と称していたことを伝える例が存在しないこと、なにより第三に示現=人麻呂を主張する神社こそ下野国における例外的な「示現神社」であると思われることから、その可能性は薄いと考えられる。現在「人丸神社」と称している神社は、宇都宮ではなく、石見や明石などの影響を受けた全国規模の人麻呂信仰と同様のものと思われるのである。

先程から述べているように、「人丸神社」が後に「示現神社」に改称したとする神社は栃木県下には存在しない。それはつまり「人丸神社」が「示現神社」とは別の形で伝播したことを示すのではないかとと思われる。勿論、その中でも突出したものは存在し、「示現神社」とまったく関係ないと断言できるわけでもない。実際は複雑に絡み合っているというのが現状であろう。以下そうした人麻呂信仰の特徴を見ていく事にする⁽³⁸⁾。

第2節 水の神

桜井満などの指摘により、人麻呂を祀る人丸神社、柿本神社は全国各地にある。祭祀の起源が歌聖としての入麻呂である、と説明がなされても、その神徳は和歌に関するよりも『和漢三才圖繪』に示されるごとく安産や防火等の神として崇められてきた。そして下野においては水神としての性格も強い

ようである。小林の論考から栃木県下の人麻呂信仰を個別に見ても、神社や祠になっているところに湧水など水利と関連するものが多いことは一目瞭然である。また、個人的な氏神として祀られたものもあるようである。人丸神社のある地域、特に安蘇郡や下都賀郡にかんして言えば、北に日光、那須連山を臨み水の豊富な場所であることが伺える。当然いたるところに湧水があると見ていいのではないだろうか。

もちろん下野全域の水神全てが人麻呂であるわけでもない。しかし、水と関わりのある人麻呂像が明石、石見からと伝播したことを物語ってはいるだろう。

第3節 柿の木との関連

次に小林の報告を見ると、栃木県下における柿の木についての禁忌と関係していることが特徴としてあげられている。「人丸神社」や、人麻呂とは関係なさそうな「示現神社」でも、柿の木を神聖視しており、伐採や燃やすことを禁じているという神社の話を探録している。県下において柿木がどのような位置を占め、いかに利用されたか、されなかったのかを考察するまで今回はいたらなかった。柿の木を神聖視する風習が栃木県に、人丸信仰とは別の形で存在するならばそこに柿本の姓を持ち全国的に著名な歌人である人麻呂と結びつくことは容易なことであるだろう。また、仮に示現神社=人麻呂という知識が正誤、新旧に関係なく土地の人々に伝われば「柿本人麻呂を祀るのだから柿の木を大切にしないではいけない」という伝説に変わっていくこともありうるであろう⁽³⁹⁾。柿の木と人麻呂信仰についての詳細も今後の課題としたい。

第4節 安蘇郡小中の人丸神社と人麻呂信仰

下野における人麻呂信仰の一つの中心地として宇都宮二荒山神社とは別に安蘇郡において中心的役割を持っていたと考えられる神社が存在する。それは佐野市小中の人丸神社である⁽⁴⁰⁾。ここは県下で唯一人麻呂の事績に関する伝説を持つ。『安蘇史』にあるその説は

柿本人丸朝臣は手負ひになりて此土地に來り小中の黍畑へ逃げ込み敵を遣り過ごして危難を免かれたるも黍殻の突りにて片目をを潰ぶし暫く此地に止まりたるが為めに土人其靈を祀りて柿本人丸大明神と号すると云ふ、是等の為めに小中に於ては以来黍を作るを禁じたりと云ふ⁽⁴¹⁾

というものである。この記述内容は、柳田も一つ目神の伝説の類話として紹介している。また『下野神社沿革誌』では「本社は元慶元年三月里民信仰により勧請し産土神と崇信す⁽⁴²⁾」とあり、同伝説は記述していない。

この神社は周辺地域に人丸信仰を流布した形跡がある。安蘇郡田沼町戸奈良の鹿島神社に合祀されている人丸神社の旧社地に保管されている人丸様の掛け軸は小中の人丸神社が崇敬者に配ったものであるという。参詣地からもらった札や絵などをもとに祠がつくられ信仰される、といった事例は人麻呂に限ったことではないであろう。小中の人丸神社について『安蘇史』は宇都宮二荒山神社の人麻呂祭神説を掲げ、関連を考察している。さらにこの地には人麻呂が派生したのか小倉百人一首の撰で有名な歌人藤原定家の伝説を記し、一説として神社の定家勧請説をも示している⁽⁴³⁾。そして現在でも「定家の森」と称する土地もあり、この神社についての説明、縁起がさまざまな形で生産されたであろうことが想像できる。もちろん県下の人麻呂信仰の総本社と言うことでもないだろうが、人麻呂畫像を配布するなど、人麻呂信仰を流布した時期があった。信仰の拡大の中で祭神である人麻呂についての知識も学習され、土地と絡める伝説として定着したのであろう。

この神社には当然当然書物等の知識による影響が見て取れる。それは祭礼の期日を見てもわかる。この神社の祭日は三月十八日であったのを四月十五日に変えたのだという。観音の縁日でもあるこの三月十八日と人麻呂の関係については古くから知識層の中で人麻呂伝説に関する祭日と定められていた。柳田、梅原の示現=慈眼という解釈がなくとも、人麻呂と観音信仰が接合していたことは佐伯有清の論考によって明らかである⁽⁴⁴⁾。しかし小林の報告から推測するに、栃木県下の人丸神社において祭礼とされる日の多くは九月十九日であるという。三月十八日という人麻呂伝説において正当性がある日

に祭礼を行う神社は少ないのである。おそらくは人麻呂伝説の縁起を考証した結果縁起、伝説を合理化し、あえて三月十八日に祭礼を行おうとした結果であると思われる。実際この神社のみが突出していたかどうかまでは確認できなかったが、この小中の人丸神社の存在は少なくとも安蘇郡において大きいと思われる。

地域共同体における水神という性格もあるが、人麻呂に対する個人的信仰が祠、神社へと成長を遂げているものが少なくないようである。また個人的な氏神として信仰している状況も見逃せない⁽⁴⁵⁾。和歌の神、水の神その他さまざまな神徳を持ち、その結果下野国内に流行した神の一つとも言えるようである。

おわりに

柳田、梅原等の先学の論考から柿本人麻呂に関する考証を通して、人麻呂と信仰の関連、見解を整理してきた。そして全国規模での分析ではなく、栃木県下という狭い範囲における人麻呂観について神社の記述を通して検討を行ってきた。人麻呂像および人麻呂信仰に関する論考はあっても、人麻呂自身が伝説的な人物であり、そのためにさまざまな物語、伝説が生産されてきた。神道家や学者等によって栃木の人麻呂像は解釈され続けたといえるのではないだろうか。

その生産された伝説は、土地ごとに適応していったのであろう。各地の事例を無批判に集めて比較検討することは、個別の人麻呂観を忘却させ、日本における人麻呂像の形成の一材料とされてしまう。人麻呂が示現神社として祀られ、ゆえに慈眼すなわち観音と結びつくとした見解は、栃木県下の一事例を全国区に拡大することから生まれたのだ。

本稿ではそうした解釈があくまでも仮説であることを考察し、栃木県内において①宇都宮二荒山神社の祭神解釈の変遷が人麻呂祭神となったもの②全国展開している人丸信仰、という二種類に分類できることを明らかにした。

そして①の宇都宮二荒山神社（示現神社）祭神柿本人麻呂に関しては栃木県内特有の事象であり、複数の知識人によって様々に解釈された結果である可能性が濃厚となった。②は全国に分布する人麻呂信仰を踏襲しつつも県内において独自の展開をしている事も理解できたかと思う。

狭い範囲内での比較検討および特定の神社の伝説、記録について考察してきた。もちろん、ここで見てきた人麻呂観も、「県内」という全体の傾向に縛られて述べられてしまい、その中でも個性的な事例や情報を一部捨て去ることもつながっただろう。しかしながら、「日本」という全体よりは交通や伝説の担い手、社会的背景が捕えやすいと思われる。そこから読み取れるのはおそらく、県下の人麻呂信仰圏、伝説の受容、解釈、忘却の姿なのである。栃木県内の民俗誌、地方誌などに、人麻呂に関する信仰、伝説が採録されることは少ない。祭神としてのみ県内に広まっている事が一因として考えられるが宇都宮二荒山神社にいたっては人麻呂祭神説を完全に削除している。伝説はいつのまにか生まれ、語り継がれたり忘れられたりする。しかし記録や画像等により伝説や信仰の断片が残され、それを追い求める人々の解釈の材料となるようである。ここでは先学の調査、考察を足がかりにし、それらを検討し、その上で祭神の解釈について分析を行ってきたつもりである。しかし本稿は一部の神社についての事例を文献から考察したにすぎない。さらに各個の土地では更なる伝説が存在し、人丸、人麻呂、示現、二荒山等の固有名詞に影響され（或いはそれすら忘却されるかも知れないが）受容された伝説が社会の中で、口承書承等の形で再生産されている事であろう。本稿にも文献の不備、分析論理の不手際があるかとは思いますが、今後は文献のみならず現地の具体的な言葉や社会的影響を見ていく中から、伝承過程、持続、消滅の過程や、人々がいかに伝説を生みだした生まれたものを活用していくか、といった問題に発展させたい。

<註>

(1) 伝説にあらわれた柿本人麻呂像をあつかった著作の主なものには折口信夫

「柿本人麻呂」(『折口信夫全集』第九卷 所収)、齊藤茂吉 1940『柿本人麻呂 雜纂篇』岩波書店、高崎正秀 1952「柿本人麻呂序説」(『高崎正秀著作集3巻』桜楓社 所収)、梅原猛 1973『水底の歌 -柿本人麻呂論-』新潮社、桜井満1980『柿本人麻呂論』桜楓社などがある。

- (2) 下出積與 1997「古代の人間神について」(『日本古代の仏教と神祇』吉川弘文館)によると昭和15年編纂の全国『神社明細帳』において柿本人麻呂を祭神とする神社は栃木が10社と一番多く、続いて島根8社群馬4社と続く。その他広島、福岡各3社、千葉、奈良各2社、北海道、滋賀、埼玉、岐阜、富山、京都、兵庫、岡山、高知、熊本、鹿児島各1社となっている。その次に桜井満1980年『柿本人麻呂論』(桜楓社)の付録一覧表によって更なる詳細な表が作られており、島根県34社、栃木県15社……と報告されている。
- (3) 柿本人麻呂を祀る神社については、高崎正秀がまず一覧表を示し、桜井満がそれを大幅に増補する形で全国にまたがる一覧表を作成している(前掲注(1)参照)。本稿においては全国分布、土地名などは桜井氏作成の一覧表を主として参照した。
- (4) 小林吉一 1978「柿本人麻呂のフォークロア(その一) -下野の人丸様」(『野州国文学』第二二号 国学院大学栃木短期大学) P.157
- (5) 小林吉一 1979「栃木の人丸石-柿本人麻呂のフォークロア(その二)」(『野州国文学』第三十・三十一合併号)
- (6) 柳田国男『定本柳田国男集』第五巻 筑摩書房 P.183
- (7) 梅原猛 1973『水底の歌 -柿本人麻呂論-』下巻 新潮社 P.208
- (8) 佐伯有清 1988「柳田国男と人麻呂伝説」(『柳田国男と古代史』吉川弘文館)は柳田、梅原等の説を紹介し、なおかつ偽文書文献等を使用し、人麻呂伝説と観音信仰、三月十八日との関連性について論証している。
- (9) 『下野神社沿革誌』第二巻、第八巻 明治三十六年(1903)
- (10) 高崎正秀は1952「柿本人麻呂序説」(『高崎正秀著作集3巻』桜楓社 所収)の付録に表において栃木県内の人麻呂と関連する神社の一覧として栃木県は22社の神社を抽出している。そのうち13社が示現(慈眼)の名を持つ。ただし人麻呂の記述を有するものはわずか2社にとどまる。
- (11) 勿論神仏分離以降の記録でしか下野各地の示現神社の記述は確認しようもな

いのであるが、桜井満の一覧表や『下野神社沿革史』の記述からは宇都宮二荒山神社分社として事代主命等を祀るものが大半を占めている。また、慈眼寺という寺院は広く見られるが、人麻呂との関連のあるとされるものは見つかっていない。

- (12) 渡辺国雄・近藤嘉博編 1962『神道集 河野本』下巻 P.522
- (13) 柳田国男『定本柳田国男集』第三十巻 P.122
- (14) 渡辺国雄・近藤嘉博編 前掲書 (12) 上巻 「宇都宮大明神事」P.481
- (15) 細矢藤策 1979 「日光・宇都宮の神々の変遷—二荒山神社縁起成立の背景—」(『野州国文学』 第三十・三十一合併号 国学院大学栃木短期大学) PP.242～246
- (16) 寺島良安 1772 『和漢三才図会』 東洋文庫 卷六六
- (17) 『下野國誌』(『神道大系 神社編二十五 上野・下野國』) P.17
- (18) 国学者伴信友の『神名帳考証』(天保十五年(1844) 黒川春村校訂版『伴信友著作集』所収)の宇都宮二荒山神社の箇所に「神寶人麻呂朝臣ノ畫土佐光信筆説宅間榮賀ト云但シ安永二年三月七日社頭炎上ノ時寶物残ラズ焼亡」とあり現存していないことを説いている。
- (19) 齊藤茂吉 1940「小室氏 人麿明神縁起」(『柿本人麿 雜纂篇』) 岩波書店 P.626
- (20) 齊藤茂吉 前掲書 (19) P.630
- (21) 寺島良安 前掲書 (16) 卷七七
- (22) 藤原兼房は和泉式部とも関連する説話(江戸時代後期天明年間成立という『丹後舊事記』所収)等も残っており、歌聖として認識されていた。
- (23) 前掲書 (17) P.15
- (24) 宇都宮宗圓を祖とする下野宇都宮氏は宇都宮二荒山神社の社職として宇都宮周辺を統治していたほか、いわゆる宇都宮歌壇を形成し、多くの歌人を輩出し、勅撰和歌集にその歌が載録されるものも多くあった。宗圓を歌聖藤原兼房の子と称するの(諸説あり)は、宇都宮氏を藤原系統に結びつけるのみならず、代々続く歌壇の血統を主張する根拠として大きな意味があったと思われる。
- (25) 桜井満 1980『柿本人麻呂論』(桜楓社) 資料編 P.261

- (26) 桜井満 前掲書 (25) 資料編 P.269
- (27) 神祇権大副兼名の長子。吉田・平野社などの社務職にあったが、吉田神社に齋場所を作って日本中の神を勧請したが、伊勢神宮側は朝敵と称して反対した。しかし彼は禁中に神書を講じ、足利義政・義尚の知遇を得て、神社に神位を授ける権限を獲得している。『神道大意』等の著作がある。
- (28) 阿蘇瑞枝 1972『柿本人麻呂論考』おうふう 巻末付録 吉田文庫版『超大極秘人丸伝』p.1211
- (29) 松永貞徳『戴恩記』上 (『続群書類従』958巻所収) P.658
- (30) 細川幽齋、松永貞徳らによる古今伝授に吉田神道の解釈が関与していた点は、三輪正胤 1994「八雲神詠伝の成立と流転」(『歌学秘伝の研究』風間書房)、小高敏郎 1956『松永貞徳の研究』続編 などにより明らかである。
- (31) 『神道大系 論説編 卜部神道(上)』(神道大系編纂会) P.467 を参照。
- (32) 梅原猛 前掲書 (7)
- (33) 桜井満 1977「柿本人麻呂 -明石をめぐる-」(『歴史公論』昭和五十二年四月号) P.161
- (34) 二荒山(日光山)と小野氏に関する論及は古く柳田前掲書(13)、高崎前掲書(10)などによって考察されている。また、『群書解題』の「宇都宮大明神代々奇瑞事」解説(第六 PP.276~279 1962年 西田長男筆)では人麻呂祭神説の原因を小野氏の影響と分析している。
- (35) 『神道大系 神社編三十一』(神道大系編纂会) P.132 祭神名の確定はないが二荒山=補陀落=観音のいる場所との説をしりぞけ、排仏的立場での記述をしている。
- (36) 『日本庶民生活史料集成 第二十六巻 神社縁起』(三一書房) P.506 ここに説明される祭神は現在の日光二荒山神社の祭神。宇都宮も同様にこの三神を祀る、との説もある。
- (37) 『下野国誌』には近世国学者の豊城入彦命祭神説が多数引用されている。
- (38) この事例は小林吉一前掲書(4)および前掲書(5)おける報告、および『下野神社沿革誌』、『下野国誌』を参照した情報をもとに分析している。
- (39) 『人丸秘密抄』等には人麻呂が柿の木に示現した、との説話が記されている。
- (40) 人麻呂の伝説として栃木県下で専ら引用されるのはこの小中の人丸神社であ

り、柿本人麻呂を祀る示現神社の例はきまって那須郡小木須の示現神社である。他の神社には祭神としての入麻呂の記述以外伝説は記述されていないのが現状である。

- (41) 桜井満 前掲書 (25) 付録資料
- (42) 前掲書 (9) 第二卷
- (43) 桜井満 前掲書 (25) 付録資料 宇都宮大明神の宗円合祀、小中は藤原定家勸請との説を併記している。
- (44) 佐伯有清前掲書 (8)
- (45) 小林吉一前掲註 (5)